

饑餓陣営

一幕

宮沢賢治

青空文庫

人物 バナナン大将。

特務曹長、
そうちよう

曹長、

兵士、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十。

場処 不明なるも劇中マルトン原と呼ばれたり。

時 不明。

幕あく。

砲弾^{ほうだん}にて破損せる古き穀倉の内部、
辛^{から}くも全滅^{ぜんめつ}を免^{まぬ}か

れしバナナン軍団、マルトン原の臨時幕^{ばくえい}営。

右手より曹長先頭にて兵士一、二、三、四、五、登場、一列
しへき四壁に沿いて行進。

曹長「一時半なのはどうしたのだろう。

バナナン大將はまだやってこない

ストマクウオツチ

胃 時 計はもう十時なのに

バナナン大將は帰らない。」

正面壁に沿い左向き足踏あしぶみ。

どら(銅鑼の音)

左手より、特務曹長並ならびに兵士六、七、八、九、十 五人登場、

一列、壁に沿いて行進、右隊足踏みつつ拳手の礼 左隊答礼。

特務曹長「もう二時なのはどうしたのだろう、

バナナン大將はまだ来ていない

ストマクウオツチはもう十時なのに

バナナン大將は帰らない。」

左隊右壁に沿い足踏み（銅鑼）

曹長特務曹長（互^{たがい}に進み寄り足踏みつつ唱^{うた}う）

「糧^{りよう}食^{しょく}はなし 四月の寒さ

ストマクウオツチももうめちやめちやだ。」

合唱「どうしたのだろう、バナナン大將

もう一^{いっぺん}遍^{べん}だけ 見て来よう。」別々に退場

（銅鑼^{どら}）

右隊登場、総^{すべ}て始めのごとし。可^{かなり}成^{つか}疲れたり。

曹長「もう四時なのにどうしたのだろう、

バナナン大將はまだ来ていない

もう四時なのにどうしたのだろう。

バナナン大將は帰らない。」

左隊登場

「もう四時半なのにどうしたのだろう、

バナナン大將はまだ来ていない

もう五時なのにどうしたのだろう

バナナン大將は 帰らない。」

(銅鑼)

曹長特務曹長

「大将ひとりでどこかの並木なみきの

苹果りんごを叩たたいているかもしれない

大将いまごろどこかのはただ

人にんじん蔘じんガリガリ 噛かんでるぞ。」

（銅鑼）

右隊入場、著いちじるしく疲れ辛かろうじて歩行す。

曹長「七時半なのにどうしたのだろう

バナナン大将はまだ来ていない

七時半なのにどうしたのだろう

バナナン大将は 帰らない。」

左隊登場 最つか労れたり。

曹長特務曹長

「もう八時なのにどうしたのだろう
 バナナン大將は まだ来ていない。
 もう八時なのにどうしたのだろう
 バナナン大將は 帰らない。」

(銅鑼)

立てるもの合唱(きれぎれに)

「いくさで死ぬならあきらめもするが
 いまごろ餓^うえて死にたくはない
 ああただひときれこの世のなごりに
 バナナかなにかを 食^くいたいな。」

(共に倒る^{たお}) (銅鑼^{どら})

バナナン大将登場。バナナのエボレットを飾^{かざ}り菓子^{かし}の勲^{くんしよ}章^うを胸^{みた}に満せり。

バナナン大将

「つかれたつかれたすっかりつかれた

脚^{あし}はまるつきり 二本のステッキ

いったいすこうし飲み過ぎたのだし

馬肉もあんまり食いすぎた。」

(叫^{さけ}ぶ。) 「何だ。 まつくらじやないか。 今ごろになつてま

だあかりも点^つけんのか。」

兵士等辛うじて立ちあがり挙手の礼。

大将「灯あかりをつけろ、間まぬ抜けめ。」

曹長点燈す。兵士等大将のエボレット勲章等を見て食せんとするの衝しょうどきはなはだ動うご甚しし。

大将「間抜けめ、どれもみんなまるで泥どろ人形だ。」

脚を重ねて椅子いすに座す。ポケットより新聞と老眼鏡とを取り出し殊ことさら更に顔をしかめつつこれを読む。しきりにゲツプす。
やがて睡ねむる。

曹長（低く。）「大将の勲章は実に甘うまそうだなあ。」

特務曹長「それは甘そうだ。」

曹長「食べるというわけには行かないものでありますか。」

特務曹長「それは蓋けだしいかない。軍人が名譽めいよある勲章を食ってし

まうという前例はない。」

曹長「食つたらどうなるのでありますか。」

特務曹長「軍法会議だ。それから銃殺じゅうさつにきまっている。」間、
兵卒一同再び倒る。

曹長おもて（面をあぐ。）「上官。私は決心いたしました。この饑餓陣

営の中に於おきましては最早もはや私共の運命は定さだまつてあります。戦

争の為ためにでなく飢餓の為に全滅ぜんめつするばかりであります。かの

巨大なるバナナン軍団のただ十六人の生存者われわれもまた死
ぬばかりであります。この際私が將軍の勲章とエボレットとを
盗ぬすみこれを食しますれば私共は死ななくても済みます。そして
私はその責任を負つて軍法会議にかかりまた銃殺されようと思

います。」

特務曹長「曹長、よく云つて呉れた。貴様だけは殺さない。おれもきつと一いっしょ緒に行くぞ。十の生命の代りに二人の命を投げ出そう。よし。さあやろう。集まれつ。気を付けつ。右いおい。直れつ。番号。」

兵士「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、」

特務曹長「よし。閣下はまだおやすみだ。いいか。われわれは軍律上少しく変則ではあるがこれから食事を始める。」兵士よろこ悦ぶ。
曹長（一足進む。）

特務曹長「いや、盗むというのはいかん。もつと正々堂々とやらなくちやいけない。いいか。おれがやろう。」

特務曹長バナナン大将の前に進み直立す。曹長以下これに従
い一列に並ぶ。^{なら}

特務曹長（挙手、叫ぶ。）「閣下！」

バナナン大将（徐に眼を開く。^{おもむろめ}）「何じや、そうぞうしい。」

特務曹長「閣下の御勲功は実に四海を照するのであります。」

大将「ふん、それはよろしい。」

特務曹長「閣下の御名誉は則ち私共^{すなわ}の名誉であります。」

大将「うん。それはよろしい。」

特務曹長「閣下の勲章は皆実^{みな}に立派であります。私共は閣下の勲
章を仰ぎます^{あお}ごとに実に感激^{かんげき}してなみだがでたりのどが鳴つ

たりするのであります。」

大将「ふん、それはそうじやろう。」

特務曹長「然^{しか}るに私共は未^{いま}だ不幸にしてその機会を得^{じゆうぶん}ず 充^{じゆう}分

適格に閣下の勲章を拝見するの光栄を所有しなかつたのであります。
ます。」

大将「それはそうじや、今までは忙^{いそ}がしかつたじやからな。」

特務曹長「閣下。この機会をもちまして私共一同にとくとお示しを得たいものであります。」

大将「それはよろしい。どの勲章を見たいのだ。」

特務曹長「一番大きなやつから。」

大将「これが一番大きいじや。ロンテンブナール勲章じや。」

胸より最大なる勲章を外し特務曹長に渡^{わた}す。

特務曹長「これはどの戦役せんえきでござ受領なされたのでありますか。」

大将「インド印度戦争だ。」

特務曹長「このまん中の青い所はほんもののザラメでありますか。
。」

大将「ほんとうのザラメとも。」

特務曹長「実に立派であります。」（曹長に渡す。曹長兵卒一に
渡す。兵卒一直ちにこれを嚙えんか下す。）

特務曹長「次のは何でありますか。」

大将「フアンテプラーク章じゃ。」外す。

特務曹長「あまり光つて眼がくらむようであります。」

大将「そうじゃ。それは支那しな戦のニコチン戦役にもらったのじゃ

。」「

特務曹長「立派であります。」

大将「それはそうじやろう」（兵卒二これを嚙下す。）

大将「どうじや、これはチベツト戦争じや。」

特務曹長「なるほど西^{チベツト}蔵馬のしるしがついて居^おります。」（兵

卒三これを嚙下す。）

大将「これは普^{ふふつ}仏戦争じや、」

特務曹長「なるほどナポレオンポナパルドの首のしるしがついて

居ります。然^{しか}し閣下は普仏戦争に御参加になりましたのであり

ますか。」

大将「いいや、六十銭で買ったよ。」

特務曹長「なるほど、実に立派であります。六十銭では安すぎます。」

大将「うん、」（兵卒四これを嚙下す。）

特務曹長「その次の勲章はどれでありますか。」

大将「これじゃ、」

特務曹長「これはどちらから贈^{おく}られたのでありますか。」

大将「それはアメリカだ。ニューヨウクのメリケン粉株式会社が贈られたのだ。」

特務曹長「そうでありますか。^{おどろ}愕くべきであります。」

（兵卒五これを嚙下す。）

特務曹長「次はどれでありますか。」

大将「これじゃ、」

特務曹長「実にめずらしくあります。やはり支那戦争でありますか。」

大将「いいや。支那の大將と豚ぶたを五匹ひきでとりかえたのじゃ。」

特務曹長「なるほど、ハムサンドウィッチですな。」（兵卒六こ
れを嚙下す。）

大将「これはどうじゃ。」

特務曹長「立派であります。何勲章でありますか。」

大将「むすこからとりかえしたのじゃ。」（兵卒七嚙下。）

特務曹長「その次は、」

大将「これはモナコ王国に於おいてばくちの番をしたとき貰もらったのじ

や。」

特務曹長「はあ実に恐れ入ります。^{おそ}」（兵卒八嚙下。）

大将「これはどうじゃ。」

特務曹長「どこの勲章でありますか。」

大将「手製じゃ手製じゃ。わしがこさえたのじゃ。」

特務曹長「なるほど、立派なお作であります。次のを拝見ねがい

ます。」（兵卒九嚙下。）

大将「これはなアフガニスタンでマラソン競争をやったの
じゃ。」（兵卒十嚙下。）

特務曹長「なるほど次はどれでありますか。」

大将「もう二つしかないぞ。」

特務曹長（兵卒を検して）「もう二つで丁度いいようであります。
。」

大将「何が。」

特務曹長（烈しくごまかす。^{はげ}）「そうであります。」

大将「勲章か。よろしい。」（外す。）

特務曹長「これはどちらから贈られましたのでありますか。」

大将「イタリヤごろつき組合だ。」

特務曹長「なるほど、ジゴマと書いてあります。」（曹長に）

「おい、やれ。」（曹長嚙下す。）

特務曹長「実に立派であります。」

大将「これはもつと立派だぞ。」

特務曹長「これはどちらからお受けになりましたのでありますか。
」

大将「ベルギ戦役マイナス十五里進軍の際スレンジングトンの街道で拾ったよ。」

特務曹長「なるほど。」（嚙下す。）「少し馬の糞^{ふん}はついて居りますが結構であります。」

大将「どうじゃ、どれもみんな立派じやろう。」

一同「実に結構でありました。」

大将「結構でありました？　いかな。物の云いようもわからない。結構でありますと云うもんじゃ。ありましたと云えば過去になるじゃ。」

一同「結構であります。」

特務曹長「ええ、只^{ただいま}今のは実は現在完^{かんりよう}了^{りょう}のつもりであります。ところで閣下、この好機会をもちまして更^{さら}に閣下の燦爛^{さんらん}たるエボレットを拝見いたしたいものであります。」

大将「ふん、よかろう。」

（エボレットを渡す。）

特務曹長「実^{はなはだ}に甚しくあります。」

大将「うん。金無垢^{きんむく}だからな。溶^とかしちやいかんぞ。」

特務曹長「はい大^{だい}丈夫^{じやうぶ}であります。後列の方の六人でよく拝見しろ。」（渡す。最後の六人これを受けとり直ちに一箇ずつちぎる。）

大將「いかん、いかん、エボレットを壊しちやいかん。」

特務曹長「いいえ、すぐ組み立てます。もう片つ方拝見いたした
いものであります。」

大將「ふん、あとですつかり組み立てるならまあよろう。」

特務曹長「なるほど金無垢であります。すぐ組み立てます。」

（一箇をちぎり曹長に渡す。以下これに倣う。なら おの各皮を剥く。）

大將（愕く。）「あついかんいかん。皮を剥いてはいかんじゃ。」

特務曹長「急ぎ呑み下せいおいつ。」（一同嚥下。）

大將（泣く。）「ああ情けない。犬め、畜生ども。泥人形ど

も、勲章をみんな食い居ったな。どうするか見ろ。情けな

い。うわあ。」

(泣く。)(兵卒 悄然^{しょうぜん}たり。)

(兵卒らこの時漸く^{ようやく}饑餓^{きが}を回復し良心の苛責^{かしゃく}に勝^たえず。)

兵卒三「おれたちは恐ろしいことをしてしまったなあ。」

兵卒十「全く夢^{むちゆう}中^{ちゆう}でやってしまったなあ。」

兵卒一「勲章と胃袋^{いぶくろ}にゴム糸がついていたようだったなあ」

兵卒九「將軍と国家とにどうおわびをしたらいいかなあ。」

兵卒七「おわびの方法が無い。」

兵卒五「死ぬより仕方ない。」

兵卒三「みんな死のう、自殺しよう。」

曹長「いいや、みんなおれが悪いんだ。おれがこんなことを発案したのだ。」

特務曹長「いいや、おれが責任者だ。おれは死ななければならぬ。
い。」

曹長「上官、私共二人はじめの約束やくそくの通りに死にましょう。」
特務曹長「そうだ。おいみんな。おまえたちはこの事件については何も知らなかった。悪いのはおれ達二人だ。おれ達はこの責任を負って死ぬからな、お前たちは決して短気なことをして呉れるな。これからあともよく軍律を守って国家のためにつくしてくれ」

兵卒一同「いいえ、だめであります。だめであります。」
特務曹長「いかん。貴様たちに命令する。將軍のお詞ことばのあるうち動いてはならぬ。気を付けっ。」兵卒等直立。

特務曹長「曹長、さあ支度したくしよう。」（ピストルを出す。）「祈いの

ろう。一所に。」

特務曹長「饑餓陣営のたそがれの中

犯おかせる罪はいとも深し

ああ夜のそらの青き火もて

われらがつみをきよめたまえ。」

曹長「マルトン原のかなしみのなか

ひかりはつちにうずもれぬ

ああみめぐみのあめを下し

われらがつみをゆるしたまえ。」

合唱「ああ、みめぐみの雨をください

われらがつみをゆるしたまえ。」

（特務曹長ピストルを擬^ぎし將^{まさ}に自殺せんとす。）

（バナナン大將この時まで瞑^{めい}目^{もく}したるも忽^{たちま}ちにして立ちあがり叫^{さけ}ぶ。）

大將「止まれ、やめい。」

（特務曹長ピストルを擬したるまま呆^{ぼう}然^{ぜん}として佇^{ちより}立^つす。

大將ピストルを奪^{うば}う。）

バナナン大將「もうわかった。お前たちの心底は見届けた。お前たちの誠心^{くろ}に較^{くら}べてはおれの勲章などは実に何でもないじや。

おお神はほめられよ。実におん眼^めからみそなわすならば勲章やエボレットなどは瓦礫^{がれき}にも均^{ひと}しいじや。」

特務曹長「將軍、お申し訳けのないことを致いたしました。」

曹長「將軍、私に死を下されませ。」

バナナン大將「いいや、ならん。」

特務曹長「けれどもこれから私共は毎日將軍の軍装ぐんそう拝しますぞ」

とに烈はげしく良心に責められなければなりません。」

大將「いいや、今わしは神のみ力を受けて新らしい体操を發明したじゃ。それは名づけて生産体操となすべきじゃ。従来の不生産式体操と自おのずから撰せんを異にするじゃ。」

特務曹長「閣下、何とぞその訓練をいただきたくあります。」

大將「ふん。それはもちろんよろしい。いいか。」

では、集れつ。（総すべて号令のごとく行わる。）シヨン。右い習

え。直れっ。番号。」

兵士「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、」

兵士伍ごを組む。

大将「前列二歩前へおいつ。偶数ぐうすう一步前へおいつ。」

大将「よろしいか。これから生産体操をはじめる。第一果樹整枝せいし法、わかったか。三番。」

兵卒三「わかりました。果樹整枝法であります。」

大将「よろしい。果樹整枝法、その一、ピラミッド、一の号令でこの形をつくる。二で直るいいか」

大将 両腕りょううでを上げ整枝法のピラミッド形をつくる。

大将「いいか。果樹整枝法、その一、ピラミッド。一、よろし。

二、よろし、一、二、一、二、一、やめい。」

大将「いいか次はベース。ベース、一、の号令でこの形をつくる。二で直る。いいか。わかったか。五番。」

兵卒五「はいわかりました。ベース。盃^{はいじよう}状仕立であります。」

大将「よろしい。果樹整枝法その二、ベース一。」

兵卒「一、」

大将「二、一、二、一、二、一、二、やめい。」

大将「次は果樹整枝法その三、カンデラール。ここでは二枝力ンデラール、U字形をつくる。この時には両^{りようかた}肩と両腕とでUの字になることが要領じゃ、^{いたずら}徒にここが直角になることは

血液循環じゅんかん環またの上からも又樹液運行の上からも必要としない。

この形になることが要領じゃ。わかったか。六番」

兵卒六「わかりました。カンデラール、U字形であります。」

大将「よろしい。果樹整枝法その三、カンデラール、はじめつ
一、二、一、二、一、二、一、二、やめい。」

大将「よろしい。果樹整枝法その四、又その一、水平コルドン。
はじめつ。一、二、一、二、一、二、一、二、一、二、やめい。」

大将「次はその又二、直立コルドン。これはこのままでよろしい。
ただ呼称だけを用うる。一、二、一、二、よろしいか。八番。」
兵卒八「直立コルドンであります。」

大将「よろしい。果樹整枝法、その四、又その二、直立コルドン、

はじめつ、一、二、一、二、一、二、一、二、一、二、一、やめい。」

大将「次は、エーベンタール、扇^{せんじょう}状仕立、この形をつくる。

このエーベンタールのベースとちがう所は手とからだが一平面内にあることにある。よろしいか。九番。」

兵士九「はいつ。果樹整枝法その五、エーベンタールであります。」

大将「よろしい。果樹整枝法、その五、エーベンタール、はじめつ、一、二、一、二、一、二、一、やめい。」

大将「次は果樹整枝法、その六、棚^{たな}仕立、これは日本に於^{おい}て梨^{なし}葡萄^ぶ等の栽^{さい}培^{ばい}に際して行われるじや。棚をつくる。棚を。わか

ったか。十番。」

兵士十「果樹整枝法第六、棚仕立であります。」

大将「よろしい。果樹整枝法第六棚仕立、はじめつ。一」

（兵士ら腕を組み棚をつくる。バナナン大将手籠てかごを持ちてその下を潜くぐりしきりに果実を収む。）

バナナン大将「実に立派じや、この実はみな琥珀こはくでつくつてある。それでいて琥珀のようにおかしな匂においでもない。甘いあまつめたい汁しるでいっぱいじや。新鮮なエステルにみちている。しかもこの宝石は数も多く人をもなやまさないじや。来年もまたみのるじや。ありがたい。又この葉の美しいことはまさに黄金きんじや。日光来りて葉緑を照しょうてつ徹すれば葉緑黄金を生ずるじや。讃たたうべきかな神よ。」

（將軍籠にくだものを盛りて出で来る。手帳を出しすばやく何か書きつく、特務曹長に渡す、順次列中に渡る、唱いつつ行進す。兵士これに続く。）

バナナン大将の行進歌

合唱「いさおかがやく バナナン軍

マルトン原に たむろせど

荒さびし山河の すべもなく

饑餓の 陣営 日にわたり

夜をもこむれば つわものの

ダムダム弾や 葡萄弾

毒瓦斯タンクは 恐れねど

うえとつかれを
いかにせん。

やむなく食^はみし
將軍の

かがやきわたる
勲章と

ひかりまばゆき
エボレット

そのまがつみは
録^{しる}されぬ。

あわれ二人の
つわものは

責に死なんと
したりしに

このとき雲の
かなたより

神ははるかに
みそなわし

くだしたまえる
みめぐみは

新式生産体操ぞ。

ベースピラミッド カンデラブル
 またパルメット エーベンタール
 ことにも二つの コルドンと
 棚の仕立に いたりしに
 ひかりのごとく 降^{くだ}り来し
 天の果実を いかにせん。
 みさかえはあれ かがやきの
 あめとしめりの くろつちに
 みさかえはあれ かがやきの
 あめとしめりの くろつちに。
 「

幕。

青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

※底本で、「バナナン大将」「バナナン軍団」の「ン」はすべて小書きです。

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

饑餓陣営

一幕

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 宮沢賢治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>